

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年7月30日(土)

《真の悔い改め ～周りの視線のためでなく、自分の心の痛みのために～》

人間が罪を犯した後の反応を見ますと、その人が成熟しているかどうか表れます。

私たちは、罪を犯したら恥を感じます。そして同時に、恐れも感じます。しかし、恥というものについて間違えて考えていないでしょうか。たとえば、誰かに間違いを知られ、いろいろな人々から視線を向けられるから恥ずかしいと思っていないでしょうか。もし罪を犯しても、「誰も見ていないところならば大丈夫」と思い、簡単に自分を赦していないでしょうか。そのような反応は、全ての人間の心理だと思います。しかし、人格的に本当に成熟した人は、人に知られたために受ける視線より、まず自分の心の痛みを意識します。「自分に対して恥ずかしい」これが、真の恥ではないでしょうか。周りの視線のために恥を感じるのでは、絶対正しい悔い改めは出来ません。悔い改めを体験するためには、誰かがいるかいないかに関係なく、“自分が犯した間違いや罪に対して、自分の心を痛める”ことが必要です。それができれば、その人には進歩する可能性があります。

しかし、この世の中を見てください。人の目ばかり気にして、「人に知られなければ大丈夫」と思い、知らないうちに自分が罪を犯したことさえ忘れてしまっています。そうではありませんか。たとえ人に見えない所であっても、恥を感じたらその恥に責任をとろうとする心が必要です。そういう心があれば、その人は何とか立ち直れます。「誰も見ていないからいいよ」と自分で自分を安心させてしまうのは、自分に対して卑怯なことをしていることになります。

今日の福音(マタイ 14:1-12)で紹介されたヘロデ、妻のヘロディア、そしてその娘。この3人は、全て今申し上げた他人の視線で心を動かしました。

みんなの前で誓ってしまい、面目が立たないから、気に入ることではないけれど仕方なく、「ヨハネの首を切って、盆に載せて持って来るように」と命令したヘロデの卑怯な心。盆に載せられた人の頭を当然のように受け取り、母親に渡すヘロディアの娘の心も正常ではありません。そしてヘロディアは、女性の敏感な心で、ヘロデよりもっと人々の視線を意識し、恥を感じたと思います。だから、洗礼者ヨハネの存在が不便になったのでしょうか。

結局、この3人は、悪魔のいたずらの中にいたのです。

私たちもいろいろな間違いを犯しながら生きています。その時、周りのことより、自分のことを考えて心を痛めてください。そうすれば、再び同じ過ちを犯さないで済むようになると思います。

赦しの秘跡を受ける時に、毎回同じ内容で赦しの部屋に入る人がいます。また、「同じことを何回も言うのが恥ずかしいから赦しの部屋に行きたくない」という愚かな考えの人もいるでしょう。しかし、それを自分のせいにする必要はありません。自分を責めてもこれは治りません。本当にそういうことから解放されたければ、本当に癒されたければ、その犯した罪を実感してください。その罪の中に入

って、どのくらい痛い罪であるかをよく感じてください。そして、その罪によって自分がどのくらい崩されてしまうか、よく考えてください。それが出来た時に、<sup>まこと</sup>真の悔い改め、反省ができるのだと思います。

反省は他人を意識しながらするものではありません。「この世の中に自分だけがいる」という気持で自分を見ながら心を痛めるものです。それを今日の福音をとおして考えてみましょう。

ありがとうございました。